

2019年7月10日

『St. Paul's Librarian』第33号 正誤表

以下、訂正いたします。

失礼を心よりお詫び申し上げます。

誤	
p.212, 1.3	8日

→

正	
	6日

鈴木均さんを偲んで

小黒 浩司（作新学院大学教授）

立教大学 OB で、千葉県浦安市立図書館司書の鈴木均さんが、2018年5月8日に亡くなった。まだ46歳であった。残念でならない。

鈴木さんは1972年長野県松本市生まれ。1995年に文学部英米文学科を卒業、浦安市立図書館の司書となった。2003年大学院 21世紀社会デザイン研究科に在職のまま入学、2004年修了した。修士論文は「公共図書館の可能性：情報提供・コミュニティ」であった。

鈴木さんは実力派司書として著名で、多数の論著がある。立教大学のウェブサイト中の司書課程の卒業生のページにも登場しており、ご存知の方も多と思う。ここでは鈴木さんと筆者の個人的な付き合いのことを記して、故人を偲びたい。

鈴木さんと初めて会ったのは、彼がまだ学部生の頃であった。当時の司書課程主任河井弘志先生のご紹介で、旧12号館の司書課程研究室であいさつを交わした。

しかし彼の名前をしっかりと心に刻み付けることになったのは、東京書籍の『図書館資料論』（2008年刊）編集の時であった。この本は同社の「新現代図書館学講座」シリーズの1冊で、河井先生が編まれた『図書館資料論』（1998年刊）の新訂版であった。先生のご推挙により、鈴木さんには「図書館所蔵資料と資料選択の理論」と「資料の更新」の2章を執筆していただいた。

彼の原稿を読んで、正直舌を巻いた。その頃選択論の世界では、要求論と価値論の空中戦が繰り広げられていた。そうした時代に鈴木さんは浦安市立図書館の貸出しデータを用いて、実証的に資料選択を論じていた。この国の選択論の歴史を塗り替える論考といっても過言ではなかろう。

彼の著作の特色は、浦安での実践を基礎に、大学院での学修を加えて培われたところにあり、説得力があった。そんな鈴木さんと、また一緒に仕事をしたいと思った。

その機会は意外に早くやってきた。ミネルヴァ書房の「講座・図書館情報学」シリーズの1冊として『図書館サービス概論』を編集することになったのである。鈴木さんには「貸出しサービス」「図書館サービスと市民・利用者」「児童サービス・ヤングアダルトサービス」の3章の執筆をお願いした。

さきの東京書籍のテキスト2章にしても、このミネルヴァ書房のテキスト3章にしても、鈴木さんをご自身の修論をもとに、その後の知見を加味して書くことができ、彼の実力が発揮できる分野といえる。鈴木さんは期待にたがわず、いち早く原稿を書き上げて送ってくれた。

ところがいろいろな事情が重なり（多くが編者の怠慢である）、刊行が延び延びになってしまった。鈴木さんには大変申し訳ないことをしたと思う。それでも2016年に編集作業を再開し、2018年度中刊行をめざして、すでに提出された原稿の最終的な点検をお願いした。2017年の秋のことであった。

年末になって、最初の手直し原稿がメール添付で届いたのだが、メールには思いがけないことが記されていた。悪性黒色腫で末期を宣告され、脳への転移によって入院中であるという。体調がすぐれないということは聞いていたが、そこまで悪いとは思ってもよらなかった。

この病気がたちの悪い病であることは、親戚が罹患したことがあり、知っていた。彼のためにもこの本を早期刊行しなければならない。他の仕事は後回しにして、鈴木さんの原稿の

編集を最優先で進めることにした。こうして2018年1月からおよそ3か月の間の、彼との二人三脚の仕事が始まった。

鈴木さんの文章は明快であり、こちらでとくに手を加える必要はない。しかし病床でおもにスマートフォンを使って書いて（打って）いる。そこで彼の文章の持ち味を損ねないように、段落を切ったり、シリーズの執筆要綱に沿って表記を統一したりするなどの手直しを行った。この手直し原稿を打ち出して鈴木さんに手を入れてもらう。それをまたこちらで整理し、打ち出して鈴木さんに送る。こうして徐々に原稿をまとめていった。

もう一つこちらで担当したのが、引用文献の確認である。鈴木さんは大変な読書家であることでも有名だ。東京書籍の『図書館資料論』でも、アンダーソンの『ロングテール』などを使って驚いた。今回の『図書館サービス概論』も、図書館情報学分野だけでなく、経営学や社会学など幅広い分野の資料を駆使して論じている。おかげで図らずも鈴木さんの読書遍歴を追体験することになり、自分にもいい勉強になった。しかしリッツアの『マクドナルド化する社会』、パットナムの『孤独なボウリング』、アレントの『人間の条件』などいずれも大部の図書で、これらの読破にはこちらも苦戦した。

その後彼から、体調が安定し1月末に退院したと連絡がきた。原稿の編集作業もはかどり、「貸出し」と「図書館サービスと利用者」の2章の編集は、順調に進んだ。あまり根を詰めるとよくないのではと心配すると、こうした作業も一種の生き甲斐のようなもので楽しんでやっていると返事がきて、こちらもついつい甘えてしまい、作業を続けた。

彼はこの時期、ミネルヴァ書房の本以外にも精力的に書いている。『出版ニュース』2018年2月中旬号掲載の「私たちの図書館と「ものがたり」」、『ライブラリー・リソース・ガイド (LRG)』第22号(2018年冬号)の特集「図書館とコミュニティ」がそれである。図書館に対する情熱で、病魔に立ち向かおうとしているかのようであった。

一方「児童」の章については、少し時間がかかっていた。旧稿を見直すうちに色々と付け加えることが出てきて、結果として全面的な改稿に至ったようだ。しかし彼自身内容に手応えを感じており、近日中に原稿を送るとの連絡が、2月中旬に来ていた。

こちらは他の章の編集を先行させて児童の原稿を待ったのだが、なかなか届かない。3月末に不安になって、ワープロ入力などは代行するとメールをした。すると数日後、夜中に目が覚めた勢いで仕上げたと、原稿が届いた。彼自身自信作というだけあって、よく練り上げられた内容だった。

これで本文部分はほぼ完成し、その他のことに取りかかった。鈴木さんは「児童」の章に、写真を多く入れたいと希望し、その候補を送ってきた。こちらは彼から送られた写真のなかから、編集者の観点から、利用者の顔が特定できないもの、画質が良いものなど数点を選んだが、1枚だけ個人的な心情から鈴木さんの仕事ぶりがよくわかる写真を入れた。159ページの「絵本講座」の写真である。

それから、本シリーズ各巻では随所にコラム欄が設けられている。本書では全体のページ数の関係から、2~3のコラムを載せることになった。4月になって、本書の分担執筆者にコラム欄の原稿の執筆を打診した。鈴木さんについては、体調のこともあり無理強いはしなかった。彼も書ければ書いてみたいとの返事だった。

4月23日になって、鈴木さんから「私は図書館の仕事が大好き」と題した原稿が届いた。翌24日にはその修正版が来た。読んでみると、司書をめざそうとする若い人たちへの、彼のメッセージであった。

すでに原稿は編者の手を離れ、出版社が組版の準備を始めていた段階であったが、どこか

空いているところに入れてほしいと依頼した。結果第 1 章末の目立たない位置になったが（13 ページ）、それでも鈴木さんからの今後の図書館を担う人たちへの思いを載せることができた。

この「私は図書館の仕事が大好き」は、『みんなの図書館』6月号掲載された「私と「図問研」と貸出し」とともに、鈴木さんの最後の最後の文章になった。二つの文章はともに、図書館に対する愛情と、一方で図書館を取り巻く厳しい現実の間で揺れ動く彼の気持ちを率直に綴っている。多くの皆さんに読んでいただきたいと思う。

このコラムの原稿も、当方で少し整形して、鈴木さんに返送した。しかし返事は来なかった。病魔は冷酷であった。4月24日のメールが彼からの最後のメールになった。鈴木さんが亡くなったことは、その数日後河井先生からのメールで知った。

鈴木さんからは、万一の場合その後のことは編者に一任するといわれていた。校正もご家族のご了承をいただき、こちらで担当した。彼との間で何回か原稿のやり取りをし、万全を期したつもりではあったが、出版社からいくつか質問などが来た。この問い合わせに彼ならどう応えるか、思わず天を仰いでしまった。その時鈴木さんがいなくなったことを痛感した。

9月に本が出来上がり、改めて彼の書いた章を読んでみた。鈴木さんがもしあと10年、いやもう5年図書館で働き、図書館について思索を続けたならば、彼はわれわれが及びもつかないような独自の「鈴木図書館学」を築き上げたのではないかと思う。そう考えると、彼の死はあまりに早すぎる。残念としかいいようがない。